テニスの歴史

A history of tennis

1K04A132-2　　瀬野　圭紀

指導教員　　主査　加藤清忠先生　　副査　坂井利郎先生

はじめに

私は現在まで12年間テニスを続けてきた。私とテニスの出会いは近所のおばさんに無理矢理テニスコートに連れて行かれたのが始まりだった。テニスは自分の力で考え行動しなくてはならない。精神的にもとてもタフなスポーツであり、どんどんその魅力にのめり込んでいった。そして私はもっとテニスのことを知りたいという気持ちが強く、このテニスの歴史を調べるということにした。

Ⅰ　テニスの概史

テニスが今のような形で存在しているのが確認されるのは、13世紀のフランスである。その頃の呼び名はテニスではなくて「ジュー・ド・ポーム」といった。昔のテニスはスポーツといっても、最初は上流階級の遊びということで、大衆の手に届くまではかなり長い時間を要した。1930年代になっても、若い男性たちは町でラケットを手にしている姿を見られるのを恥ずかしいと感じていた。この古典的な観念によって、テニスの女性的イメージはかなり長い間続くことになった。一見テニスはとても上品なスポーツにも見えるが決して軟弱なスポーツではなく、それどころか、スピード、スタミナ、そして基本的な運動能力を持つことが第一義的に要求されるスポーツである。そしてプロ選手によって「プロ・セット」と言われる独自の簡略化された採点法が採用され本格的なスポーツに進化していくことになる。

Ⅱ　テニス史に残る偉大なプレーヤー

テニスが国際的な地位を確立し、世界各国へ広がっていくと同時に、技術のレベルが急速に向上してきた。1920年代になると、二人のスパースター、スザンヌ・ランランとウィリアム・チルデンが登場する。ランランは14歳で世界ハードコート選手権で優勝し、1919年から1925年にかけては無敗を記録することになる。そしてもう一人が、ウィリアム・チルデンである。チルデンは全米で6連覇し、全英も3度優勝した。すべての時代を通じた最強のプレーヤーで、オールラウンドな近代テニスを初めて体験したとされている。ここではこの2人のスパースターとジミー・コナーズ、ビョルン・ボルグという2人の名プレーヤーについて述べることにする。

Ⅲ　国対抗戦

国対抗試合として世界的なスポーツの行事となっているのがデビスカップとフェドカップである。デビスカップは1人の少年の夢としてスタートしたが、世界的なスポーツの行事となり、あらゆる人種、様々な政治イデオロギーをこえながら、国際親善の場を提供し続けてきた。フェドカップは、俗に「デ杯の女子版」と言われ、国際テニス連盟が主催する女子の国及び地域別対抗戦である。フェドカップの前身、フェデレーションカップが創設されたのが1963年。このイベント構想を最初に提唱したのは、ヘイゼル・ホチキス・ワイトマンという米国の女子チャンピオンで、1919年のことだった。

Ⅳ　グランドスラム　4大大会

グランドスラム4大大会とはウィンブルドン、全仏選手権、全米選手権、全豪選手権を指していう。中でもウィンブルドンは最も古い歴史を持ち、唯一の芝のコートで行われ、120年以上の伝統と格式を持ち、「白いウェア」が義務つけられている。全仏選手権は最もお洒落な雰囲気が漂う大会で、ボールボーイやアンパイヤの服装、観客の装いまでフランスならではのエスプリがいたるところにきいている。ここではこれら4大大会の生い立ちについて触れ、1年間で4大大会すべてに優勝したグランドスラム達成選手について紹介して行く。

Ⅴ　日本のテニス史

今まで世界のテニス会について述べてきたが、ここではテニスというスポーツが日本に上陸し発展してきた歴史について述べることにする。また日本のテニス界に大きな影響を及ぼした日本人選手や全日本選手権大会の歴史についても触れることにする。

おわりに

私はテニスだけに限らず私自身では歴史を変えるも残すことも出来ないと思っていました。しかし歴史を動かすのは私たちテニス選手、またテニスを愛するテニスファンの熱い気持ちだということに気付きました。私もテニスにかかわっている以上、熱い気持ちで情熱を燃やしていきたいと改めて感じた。